

暁 星 論 叢

第 73 号

論 文

領域「表現」の専門的事項の授業内容に関する一考察

～表現活動指導法の学修内容を手掛かりに～

…………… 坂 内 寿 子 …… 1
村 木 薫

領域「環境」の専門的事項の授業に関する一考察

～保育者としての資質育成における作物栽培体験の意義～

…………… 永 井 裕紀子 …… 13

領域「人間関係」に関する専門的事項・授業内容の一考察

—授業内容と保育実践を通して—

…………… 久保田 真規子 …… 25

2021年9月

加茂暁星学園

新潟中央短期大学

領域「表現」の専門的事項の授業内容に関する一考察

～表現活動指導法の学修内容を手掛かりに～

坂内 寿子
村木 薫

はじめに

教育職員免許法の改正（平成 28 年 11 月）及び同法施行規則の改正（平成 29 年 11 月）により、教職課程で履修すべき事項が全面的に見直され、平成 31 年 4 月 1 日より新たな教職課程が開始されることとなった。幼稚園教諭養成課程において「領域に関する専門的事項」が新設され、その内容については、「教職課程認定等説明会質問回答集」（平成 29 年 8 月 28 日）の記述によると、『幼稚園教育要領を踏まえるとともに、「平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－（報告書）」（以下モデルカリキュラムの開発に向けた調査研究）を参考にしつつ各大学において検討する』¹⁾との回答で示されている。

また、「領域に関する専門的事項」の考え方として『領域について、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする。幼稚園教育において、「何をどのように指導するか」という視点で見た時の「何を」を深める部分である。幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これらに限定されることなく、より幅広く、より深い内容が求められる。－中略－各領域の背景にある専門的な視点からの領域の考え方を深めることを目指して、その分野は多岐にわたることが予想されるが、必ず「幼児」「幼児期」「幼児期の教育」の視点を忘れないということを意味するものである。－中略－各大学等におけるシラバスを作成する際の留意事項、領域の内容にかかわる授業担当者の専門性を生かしつつ、モデルカリキュラムの一般目標や到達目標を踏まえ、当該領域に関しての専門的な知識・技能等を修得できるよう、工夫していく。』²⁾ことが示されている。

本学は令和 4 年 4 月入学生から、新たに幼稚園養成課程に設置された「領域に関する専門的事項」を教育課程に組み入れる予定である。幼稚園の領域に関する科目で扱う内容は、「モデルカリキュラムの開発に向けた調査研究」で示されている内容を基軸としている。

領域「表現」に関する専門的事項の授業科目名を「子どもと表現」とし、1 年次前期履修の「表現指導法」（演習 1 単位）の学修後、1 年次後期から集中授業を含む 2 年次前期の前半（演習 3 単位）に亘って行われる本学独自の表現教育プログラムと言える保育内容

の指導法に関する科目「表現活動指導法」の学修を踏まえ、授業概要、到達目標、身体表現及び造形表現に関する具体的な授業内容を計画した。

I 領域「表現」に関する専門的事項の授業科目名「子どもと表現」

授業概要

本科目は配当年度を2年次前期の後半（講義1単位）とし、指導形態は音楽・身体・造形表現を専門とする教員3名によるオムニバス形式の授業を中心に展開することとしている。

到達目標

- ①幼児の遊びや生活における領域「表現」のねらい及び内容を理解している。
- ②表現の生成する過程について理解している。
- ③幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感することができる。
- ④様々な表現を感じる・みる・聴く・楽しむことを通してイメージを豊かにすることができる。
- ⑤身の回りの物を身体の諸感覚で捉え、素材の特性を生かした表現ができる。
- ⑥表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる。
- ⑦協働して表現することを通し他者の表現を受け止め共感し、より豊かな感性や表現につなげていくことができる。
- ⑧様々な表現の基礎的な知識・技能を生かし、幼児の表現活動に展開させることができる。

授業内容

領域「表現」の専門的事項としての授業内容を計画するにあたり、領域「表現」のねらいと「子どもと表現」の到達目標を、「表現活動指導法」の学修内容としている「ミュージカルの制作」及び子どもの表現・鑑賞教材（紙芝居・パネルシアター・オペレッタ・リズム表現）の制作体験に重ね、特色ある授業内容の具体化を試みた。

II ミュージカルの制作体験から学ぶ（身体表現）

ミュージカルの制作過程での学びが、領域「表現」に関する専門的事項の学びであることを理解し、幼児期の表現活動を支援するための知識・技能・表現力を身につけるための授業内容である。グループワーク、プレゼンテーションを授業方法に取り入れた、アクティブラーニング型の授業を展開する。

授業内容1：領域「表現」の目的・ねらいと舞台上の表現との関連性

到達目標番号：①、②、③、④

これまで制作したミュージカルの演目に共通するシーンを取り出し、舞台シーンで「感じたことや考えたこと（モチーフ）」は、領域「表現」に示されている感じたことや考えたことと共通し、舞台上で表現した、「しぐさや動作、リズムカルな動き（ダンス）等」は自分なりに表現することと重なるものである。こうした体験を通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする²⁾とした育てたい資質・能力につながるものと捉える。これまでの日常生活での様々な表現体験がベースにあり、その表現体験を物語に載せて鑑賞者に分かりやすく表現している結果が舞台表現であり、このつながりの理解が、領域「表現」のねらいの理解を深める一助になるものと考えている。

感性と表現に関する領域「表現」

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ³⁾ 注. 下線は筆者

過去に制作したミュージカルに共通するシーンの例

場面Ⅰ：明るく光が射している森のシーン

感じたことや考えたこと⇒（日差し、木漏れ陽、解放感、まぶしさ、明るい感じ等）

場面Ⅱ：日も落ち、薄暗くなり足元も見えない森のシーン

感じたことや考えたこと⇒（不気味さ、怖さ、心細さ、寂しさ、薄暗い感じ、重々しさ等）

場面Ⅲ：にぎわう街中のシーン

感じたことや考えたこと⇒（人々が発するテンポの良い言葉、歌声、速いテンポの動き等）

場面Ⅳ：泣いているシーン

感じたことや考えたこと⇒（悲しみ、心細さ、心配、泣いているのはなぜ？等）

場面Ⅴ：戦いのシーン

感じたことや考えたこと⇒（恐れ、怒り、対峙、暗い感じ、鋭さ等）

場面Ⅵ：争いが解決し平和を取り戻したシーン

感じたことや考えたこと⇒（喜び、嬉しさ、団結、感動、明るさ、協働等）

注. 括弧で示した内容は筆者

学生が指導する際に、出演する子どもが3歳児から小学6年生と年齢の幅が広く、その年齢に応じた指導が求められるため、子どもの身体表現の発達（発育の原則、運動発達の特徴、イメージを表現する身体の動きの発達、動きとリズムの発達等）に関しての知識が必要となる。参加する子どもを幼児、小学1年生から3年生、小学4年生から6年生の3グループに編成しそれぞれの役柄を決めている。指導前には予め得た知識や過去のミュージカルで創作された作品をもとにダンスの大まかな振付やざっくりとした隊形を考案し指導に当たることになる。

毎回の練習では歌唱指導も併せて行われる。ダンス指導では、全体でウォーミングアップ、グループに分かれて振付指導が行われている。いきなり振付に入るような指導にならないために、ウォーミングアップでは次に示すような様々な形で表現を楽しむ工夫が施されている。

- ・「〇〇になってみよう」といった言葉掛けからイメージを身体表現する変身遊び
- ・歌に合わせてリズムカルな動作が行われる手遊び
- ・パーカッションやピアノによるリズムカルな伴奏によって様々なステップやジャンプ
- ・身体の部位や全体を伸ばしたり縮めたりする等、伸び伸びと体を動かす身体表現

その後のグループ（キャスト）別の練習ではオープニングで踊る同一の振付と他の場面でのキャスト別の歌や振付を練習する。リハーサル等の舞台練習では子ども全体の場面やキャスト別の場面でのダンスの様子を学生全員が観察できる機会を設けている。

こうしたウォーミングアップやキャスト別の練習、さらに舞台練習から、年齢に応じた子どもの動きの違いが観察でき、学生は身体表現の発達を実践的に学ぶ機会を得ている。



授業の進行

- 1 子どもとの共演が、領域「表現」に関する専門的事項の学びであることを理解し、幼児期の表現活動を支援するための知識・技能・表現力を身につけるための授業であるこ

とを解説する。

- 2 子ども係が指導している様子、舞台上のダンスシーンの動画や写真から年齢による身体表現の違いを観察し、記入する。
- 3 観察し記入した内容を基に、子どもの動きを身体表現の発達という観点から捉え、グループで出し合い、まとめた内容を発表する。
- 4 子どもの身体表現の発達について解説し、日常生活や園での遊び・生活を通して、子どもの豊かな感性や表現する力が育成されることの理解を深める。

課 題

「領域に関する専門的事項」に関する授業内容を本学独自の表現教育プログラムと言える「ミュージカル」の制作体験から身体表現に視点を置いて、2例の具体的な授業内容を試案としてまとめた。領域「表現」に関連する科目は前述した「表現指導法」、「表現活動指導法」に加えて、保育士養成課程の系列「保育の内容・方法に関する科目」にあたる「身体表現Ⅰ」との関連性も考慮していかなければならないと考えている。各科目の年次配当、授業内容を精査し、授業を展開していきたい。

また、領域の専門的事項で取り上げるべき内容として、幼小の接続が課題として挙げられる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目を手掛かりにして、領域「表現」に密接に関係する、⑩豊かな感性と表現の項目だけでなく、その他の項目にも着目し幼児の表現を様々な育ちの姿から捉える視点をもち、小学校の学修内容と連動していくことへの理解につなげていきたい。

Ⅲ 「子どもの表現・鑑賞教材の制作体験」及び「ミュージカルの制作体験」から学ぶ（造形表現）

「子どもの表現・鑑賞教材の制作体験」では「子どもワールド」という学園祭の出し物として近隣の子どもたちを対象に紙芝居、パネルシアター、リズム表現、オペレッタなどを上演している。また「ミュージカルの制作体験」でも地域の子どもたちと制作・上演を行っている。ともに領域「表現」に関する専門的事項の学びであることを理解し、幼児期の表現活動を支援するための知識・技能・表現力を身につけるための授業内容である。

授業内容1：領域「表現」の目的・ねらいと「子どもの表現・鑑賞教材の制作体験」で上演する紙芝居制作の関連について

到達目標番号：④、⑤、⑥、⑧

紙芝居を制作するにあたって三つの遊び⁴⁾を出発点としている。

①技法遊び：材料や用具の特質を理解しながら、楽しく造形感覚を育てる遊びである。

直接、素材に触れながら、偶然から生まれる形や色の不思議さ、おもしろさ、感動を味わう中で表現行為に対する抵抗感を軽減することができると考えている。例えば、ここではにじみ、ぼかし、ドリッピング、マスキング、ローリング、スタンピング、スクラッチ、フロッタージュなどの表現技法を活用し、それらの素材を一枚の厚紙にコラージュしたり、そこに様々な技法を組み合わせ、オリジナルな技法で表現する学生も出てきている。

- ②構成遊び：色紙やシール貼り、綿や糸、葉っぱや木の枝など、何かを表すというよりも積む、重ねる、並べる、貼り付けるなどの操作によって生まれる色や素材や形を楽しむというものである。例えば雲の表現に綿を使用したり、葉っぱの表現に実際の葉っぱや着色した葉っぱのスタンピングなどの表現が見られた。

- ③見立て遊び：色や形、質感などの印象を何かに見立てる遊びであり、その過程でイメージは「もの」を媒介に膨らんでいく。

例えば、手のひらや甲に絵の具をたっぷりつけてスタンピングを行う中で、その形を様々な向きや方向から見ることで動物や昆虫、植物などに見立てる行為が現れる。またドリッピングで吹いた絵の具から花火や雨などを想像することもできる。

これらの三つの遊びから6枚の紙芝居としてストーリーを展開する内容である。この過程の中で、言葉にならない象徴的な要素を学生がどのように表象していくか、時に相談を受けながらの指導となる。学生には事前に絵本の紹介や、今何に興味を持っているのかなどの言葉を投げかけたり、学生自身の経験からイメージを広げる体験を重視している。



図1 技法遊び：にじみ



図2 技法遊び：吹き絵



図3 構成遊び：コラージュ



図4 発表風景

また、本学に入学してくる学生への造形表現に関するアンケートから、小・中・高校での美術の授業で造形表現に対して苦手意識の高い学生が7割以上在籍していることがわかっている。そこで、このカリキュラムを導入することで、他人と比較したり上手に描かなければ評価が低い、等という価値観から解放したい。また、幼児の造形表現に当たる指導者として柔軟な対応や楽しく活動を行ってほしいというねらいもある。そして、造形活動は相互に影響しあうものであり、幼児と一緒に様々なものが変化していくことを楽しむことができる保育者になってほしいと思う。同時に、自らが造形活動を通じて心が解放され、自己表現への欲求を満たそうとする姿勢も大切である。そして、「こどもワールド」の舞台上、子どもたちに自作の紙芝居の読み聞かせを行うことで、鑑賞教材として様々な作品や子どもの声に触れることは、今後の造形表現の可能性への気づきの経験となると考えている。

授業内容2：領域「表現」の目的・ねらいと「ミュージカルの制作体験」舞台美術等制作との関連性

到達目標番号：④、⑤、⑥、⑦、⑧

■大道具・小道具

指導に当たっての5つの観点

①自然界を観察する大切さ

苦手意識のある学生たちが多くの中で、色彩の固定概念を取り払うために、自然界にある多様な色彩に改めて目を向けさせることから始める。例えば学生たちと一本の樹木を描く場合、樹皮の色をただ単に茶色に塗るということではなく、混色した色彩の指導をする。実際に生えている木に触らせたり、同じ葉っぱでも光が当たっている部分と当たらず影になっている部分の違いや、樹木の種類によって表面の色が全然違うことなど、先入観を取り払って正確に、実際の自然界に生えている植物を観察することから始める。

ひとつの試作として、子どもたちと森のイメージを創る。その時に木の皮を実際に貼って、そこに色水で着色した和紙を手でちぎって、葉っぱに見立てた森のイメージを試行錯誤して、平面構成してみた。(図5)



図5 子どもたちと森のイメージ作り

②自然界に見られる色彩の意味と活用法

光が当たっている樹木や葉っぱと陰になっている樹木や葉っぱの色の違いについて、パネルに直接混色しながら試行錯誤の体験をしてもらう。そこでもう一度立体感について学習し、舞台上に置かれる大道具の意味（遠くから見て認識できるか）を考え

てもらう。

また、海や空・雲の表現について、遠近による見え方の違い、また、水平線の表現の仕方、上から勢いよく流れ落ちる水の表現、雲の形や色彩（陰影）など、実際の風景を見せたり、写真や映像などで学生に確認させながら、新たな目で自然界を観察し、そこに表れている色彩の変化（グラデーション）を再確認するように心がけている。（図6, 7）

③壊れにくい構造体の理解

大道具の場合、舞台上での移動や学生が乗って演技をするなどの必然性から、内部の構造を壊れにくいものにしなければならない。のこぎりやインパクトドライバー、ねじくぎなどを使うことが求められる。そのため、大道具係の学生指導には、安全性に気を配っている。例えば学生がのこぎりを使う場合、最初うまく角材を挽けないことが多い。そこで使い方を実際に見せて挽かせてみるときれいに挽くことができる。また、角材を組み合わせて大きな構造物を作るときの木組みなども最初戸惑っているが、スケッチを見せたり、組み合わせ部分を作って見せてやることで理解していく。うまくできなかったことが舞台美術の制作を通して達成できたという経験が将来の保育者としての技能となっていくのではないだろうか。ここまで大がかりではないにしても、このうまくできなかった経験は保育者となった時に、立体物の制作時に必要な知恵や工夫の元となってくれるのではないだろうか。（図8）

④様々な素材との出会い

舞台上で使う大道具や小道具はそれぞれの機能を持っている。例えば、ピーターパンの舞台上で使用されるワニはロープで移動することが可能なように軽量で壊れない構造とすることや、歯や皮膚の感じをどのような素材で作るのか、等を学生同士で話し合っ



図6 舞台上での樹木表現例



図7 背景幕の表現例



図8 大道具 作品例

色の布を縫ってかぶせる。また歯は発泡スチロール、口の中は赤い布などで仕上げている。(図9, 10)

⑤様々な人との話し合い

大道具、小道具類の制作はすべて共同制作である。これらの係活動を通じて、前回の論叢「表現活動指導法の授業アンケート調査結果による考察(2)」⁵⁾ からわかってきたことであるが、集団で問題を解決するときのコミュニケーション能力や協調性、他者の意見やアドバイスを聞いて理解や協力を得て課題に取り組むことができるようになった等の非認知能力に関わる力の育成に寄与していることがわかっている。声を掛け合って、お互いの様子を見ながら移動したり、作ったりする経験が上記のような結果となっていると考えられる。(図11)



図9 大道具 ワニ作品例



図10 ワニの制作風景

■衣装・メイク

指導に当たっての観点

①デザイン画によるイメージの広がり

オーディションによってキャストが決まり、その時点から各学生のそれぞれ与えられた役作りが始まる。例えば、自分が演じる役柄を考える時に、大切になることはどんな衣装を身につけて、顔の表情はどんなメイクにするのかなどを絵本やミュージカルのDVD等を見ながら決めていく。そのイメージをデザイン画として書くことから



図11 大道具の組み立て風景

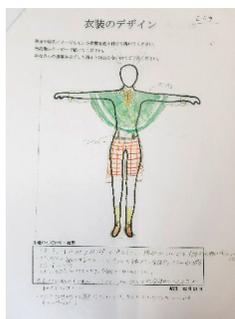
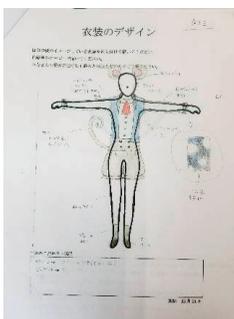


図12 デザイン画の作成例
左：眠りネズミ 右：3月ウサギ



図13 舞台上での演技

話し合いが行われていく。

例えば、「不思議の国のアリス」に登場する眠りネズミと3月ウサギを例にとってみる。

ここで衣装やメイクのデザイン画を各キャストから衣装の生地のごだわりや、動きやすい形、そして全体の色彩計画など、できるだけ細かくイメージを伝えていることがわかる。そして、型紙の作り方を学び、布地を買って裁断、縫製しているが、最近の学生はインターネットスーパー等で購入しているケースが増えている。（図12, 13）

課 題

上記の活動はキャストを演じる自己表現と集団で協力して制作する造形表現の二種類になる。ともに多様な幼児の活動に対応できるよう、また、新たな素材との出会いをもたらす導き手として、より多くの材料や用具の扱い方に熟知する必要がある。そして、「幼児」「子ども」を中心に置きながら、「表現活動指導法」や「造形表現Ⅰ（保育士養成課程）」で展開されている「遊び」概念を核とした「造形遊び」を「子どもと表現」に組み入れた授業形態を考えたい。そうすることで幼児・子どもの造形表現についての理解が深まり、応用力の幅を広げていくと考えられる。

おわりに

「表現活動指導法」の学修内容は全体を通して、あらゆる表現領域を同時に学んでいる授業形態であり、そのことは幼児の日常生活における感性の働きや表現の仕方に近いものがあると考えられる。「子どもと表現」という新たな授業を組み立てるにあたり、本学独自の伝統的な「表現活動指導法」との連携及び振り返りを軸にした形で構成したいと考えている。そのための体験作りの場として、また、アクティブラーニング型の授業としても機能していくのではないだろうか。

そして、体験からの学びがフィードバックされた子どものころの原体験とつながる機会として保育者になった時に応用展開してほしいと考えている。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省「教職課程再課程認定等説明会質問回答集」平成29年8月28日 第4版
- 2) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会：平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—一般社団法人保育教諭養成課程研究会. 2017. p8

- 3) 幼稚園教育要領解説 平成 30 年度 文部科学省 p233
- 4) 造形表現実技編 編者 花篤實 編著 三晃書 p16～17
- 5) 表現活動指導法の授業アンケート調査結果における考察(2)
～保育者養成の観点から～ 新潟中央短期大学暁星論叢第 70 号. 坂内寿子 村木薫 2017
- 6) アクティベート保育学 11 保育内容「表現」岡本拓子・花原幹夫・汐見稔幸
ミネルヴァ書房

領域「環境」の専門的事項の授業に関する一考察

～保育者としての資質育成における作物栽培体験の意義～

永井裕紀子

1. はじめに

平成27年12月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教育の資質能力の向上について～学び合う、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」ⁱを受け、平成28年11月には教育職員免許法が、平成29年11月同法施行規則が改正され、教職課程で履修すべき事項が約20年ぶりに見直された。幼稚園教諭養成課程での大きな変更点は、従来の教職課程にあった「教科に関する科目」が「イ 領域に関する専門的事項」に変更された点である。これを受けて新設科目を担当する教員は、学生に何をどのように学ばせるのか授業内容の検討が求められるが、筆者もそのひとりである。授業内容の検討にあたって参考となるのが、文部科学省から示されている新設科目の考え方やモデルカリキュラムの研究成果である（一般社団法人保育教諭養成課程研究会による委託研究）。これを参照するに筆者が担当する予定である領域「環境」の専門的事項では、幼児を取り巻く環境とその意義、幼児の思考・科学的概念や標識・文字等の関わりの発達理解など、幼児と環境との関わりについての専門的事項における感性を養い、知識、技能を身に付けることが目標とされている。考えられる授業モデルは5つあげられている。飼育栽培活動に実際に取り組んだり、仲間と話し合いをしたりと演習形式の授業モデルが多く紹介されていることから、学生の学びが主体的で対話的な営みとなり深まっていくような工夫が強く求められていることが確認できる。

近年、子どもが自然体験をする機会が減少していることが指摘されているが、子どもだけでなく保育者をめざす学生も自然体験の機会が少ない者が増えていると感じる。そのため、領域「環境」の専門的事項の授業では、学生が自然と触れ合う機会を作っていくことが重要であると筆者は考えている。今年度筆者のゼミでは、作物栽培(サツマイモ・えだ豆)に取り組んでいる。本報告は、筆者のゼミ学生が取り組んでいる作物栽培活動を、保育者としての資質育成における体験の意義から明らかにし、領域「環境」の専門的事項の授業において、栽培活動を組み込んでいくための一考察としたい。

2. 作物栽培に取り組むことになった経緯

新潟中央短期大学では、1年後期から2年の通年にかけて保育・教職実践演習の授業が

ゼミ形式で行われている。今回の作物栽培は筆者のゼミに所属する2年生8名が、保育者を目指す者として身に付けたい知識、技術また体験したいこととして掲げた活動である。学生たちは、子どもの心を豊かに育てる体験として、身近な動植物に関わることは生命の営みや不思議さに触れる重要な体験であり、特別な意味があることを理解していた。また、子どもの食を営む力を培う上で、野菜の栽培、収穫等様々な体験を通して、作物を育てることの大変さと自然の恵みとしての食材について、子どもたちが意識を持てるよう保育を計画していくことの重要性を理解していた。しかしながら、学生たちは自分たち自身がその意識や体験を有していないことを課題としていた。話し合いを通して、学生たちは保育者を目指す自分の課題を仲間と共有し、協働しながら取り組める活動として作物栽培に挑戦したいと筆者に伝えてきた。筆者自身も、自然と関わる体験を授業に組み込むことを模索していた。また、幸い本学は校舎から徒歩10分ほどのところに畑として利用できる土地を有していたことから、今年度のゼミでは作物栽培に取り組むことになった。

3. 方法

筆者のゼミ生である新潟中央短期大学2年生8名が、2021年4月から8月に取り組んだ作物栽培活動の振り返りレポートから、保育者の資質育成に関与する体験を抜粋して考察する。(1)計画、(2)畑づくり、(3)苗植え、(4)作物の管理、(5)えだ豆の収穫・調理の5場面に分けて結果と考察を報告する。なお、本報告は8月までの報告であるため、サツマイモの収穫は含まれない。学生のレポートの抜粋は1-1、1-2…と記す。

4. 結果と考察

(1) 計画 (4月)

学生たちは、作物の栽培、収穫、調理を地域の子どもたちと取り組みたいと考えた。コロナ禍であるため、子どもたちに参加してもらえる場面はどこか、その都度コロナ感染症の状況を見て進めていくことになった。子どもたちと栽培する作物として何を育てるか話し合った結果、学生たちはサツマイモとえだ豆を選んだ。学生は、その理由を以下のように書いている。

1-1 枝豆を選んだのは、実の成長過程が見られて楽しいこと。豆が主人公の絵本があり、子どもたちが親しみを持てる作物であること。色鮮やかで調理を楽しくする食材であること。サツマイモを選んだのは、土の中のイモの成長は収穫するまで見られないが、成長の様子を想像して楽しめること。収穫時に土や色々な虫、道具と関わるができること。また、枝豆とは異なり土の中で実が大きくなる作物にも親しんで欲しいと考えたからです。

学生は作物栽培の何に子どもが興味関心を持つかの観点から、実の大きさの変化をあげている。次に、その変化を子どもに伝えやすい作物は何かの観点から、土の上で実を成長させるえだ豆を選択している。えだ豆を栽培するもう1つの理由として、絵本との関わりという子どもの生活のありようから考えている。子どもに体験して欲しいことの観点からは、土や道具、虫との関わりや実の成長を想像して楽しむことをあげ、サツマイモを栽培作物として選択している。また同じ観点から、作物による成長の違いを子どもに感じて欲しいと考え、サツマイモとえだ豆2種類を栽培すると決めている。仲間との話し合いを通して、子どもの興味関心、子どもの生活実態、保育者の願いと教材という複数の観点から保育を計画する学生の体験が読み取れる。

学生たちは4月の畑づくりから10月のサツマイモの収穫までのおおよそのスケジュールを立てる。

1-2 サツマイモの収穫までの計画を立てました。苗植えの時期や収穫の時期を調べて計画を立てましたが、天候や畑の立地によっても作物の育ち方が違うと思うので、予定通りにいかないこともあると思いました。予定外だった時も含め、余裕をもった日程を立てることが難しく大変でした。また収穫時に、子どもの参加の呼びかけをどうするかも話し合いました。コロナ禍なので実際に子どもたちと収穫ができるか、これも先が見えなく参加人数など考えることが難しかったです。

自分たちの畑でも、調べた通りに作物が育つのか。作物栽培の知識があっても疑問が解消されず、生き物の成長を見通すことの難しさを体験する学生の様子が読み取れる。「予想外だった時も含め」の記述では、学生が作物の成長をいくつかの過程で捉えようとしていると考えられる。これは、コロナ禍で実現可能か先の計画が立たない子どもとの栽培活動も同様である。様々な条件の中で、作物の成長や活動の可能性を広く予想しようと苦戦する学生の体験が読み取れる。

(2) 畑づくり（5月中旬）

使用した土地は過去にも畑として活用したことがあったが、ここ2年ほどは放置していたため、雑草で埋め尽くされた荒地となっていた。その土地を利用して10平米ほどの畑づくりに取り組んだ。

2-1 楽しそうという気持ちもあって栽培に取り組もうと思ったが、実際は大変なことが多いです。一番大変だったことは畑づくりです。最初はどこが畑なのか場所が分からないくらい雑草が生えていて、抜いたり土を掘り起こし日に当てたりする作業がと

でも大変でした。畝を作ろうと決めた日にも、一週間前に草を抜いたばかりなのに、またたくさん生えていて草取りをやり直したので、植物の生命力の強さを改めて感じ、野菜を育てる以前に畑を耕し作ることから農作業は大変だということを実感しました。また、見たことのない昆虫がたくさん出てきて最初は怯えながらの作業でしたが、回数を重ねるうちに怯えるよりも昆虫を発見する喜びも感じることができました。

畑づくりの大変さや植物の生命力の強さ、また、農業や虫に対する既有概念を変化させる学生の体験が読み取れる。身近な虫は子どもの好奇心や探求心を喚起する対象である。しかし、虫に嫌悪感を示す学生は多い。虫が嫌いなことで自分は保育者にむかえないと考える学生もいる。学生が虫に対するネガティブイメージをポジティブイメージに転換する体験をしていることは特に注目すべき点といえる。

2-2 鍬で土を掘ると、土は硬くて、黄色で、粘土質でした。この土が作物を育てる土に適しているのかわからないのが怖かったです。

学生は、畑の土が粘土質であることを感覚を通して理解し、土質が作物の育ちに与える影響を考え、同時に怖さを感じている。感覚を通して対象を知り、それに対する感情を抱き、そして考える。この体験は、幼児教育でも重要とされる好奇心・探求心、そして科学的思考に繋がる体験である。ここでは学生指導の課題も見えてくる。学生は、作物がこの土質で育つのか「わからない」ことが「怖い」と記述している。その背景には、この土質では作物が育たない可能性があるかと学生が考えていると推察される。感じた不安や疑問を放置するのではなく、学生自身が自分の気づきを重要なものとして受け止め、表現し、問題を解決していく手立てを講じていく態度を育てていくことが求められる。

2-3 鍬の使い方も詳しく分からない状態だったし腰をかがめての作業だったのでとも腰が痛くなって畑をする大変さを実感しましたが、何とか畑らしくなりました。虫は苦手だけど、畑に行くと土に触れ合う回数が増えるごとに、虫に慣れてきました。触ることはできないけど、怖くて叫ぶようなことはなくなりました。虫を見つけても冷静でいられるようになりました。

2-3では、2-1と同様、虫に対するネガティブイメージをポジティブイメージに転換する学生の体験が読み取れる。同時に、馴染みのない農具との関わりに葛藤する体験が読み取れる。道具は存在するだけでは意味を成さない。道具を使いこなせるのは人間に高い能力が備わっているからだといわれている。道具を使いこなすことによって私たちの生活はより便利に、より豊かになっていく。学生は鍬について「使い方も詳しく分からない状態だったし」と記述している。学生にとって、鍬は親しみや魅力のない、使うには億劫な道

具であったと読み取れる。しかし、荒地を畑にするためにはシャベルだけでは用を成さないことは分かっていたのだろう。学生は「腰が痛く」なるまで、「腰をかがめて」作業をしたと記述している。この場面は、学生が全身を使って鍬という農具が持つ可能性を迫及する体験をしているといえる。「何とか畑らしくなりました」の記述は、試行錯誤の結果、鍬が持つ可能性や機能を獲得した体験と考えられる。

2-4 肥料の量は調べて行ったが、店で購入する時、本当にこの量でよいのか迷った。その時店に買い物に来ていたおばあちゃんが「何を植えるの」と言ってきた。私たちがイモを育てることを伝えると「そんなに（肥料）要らない」と教えてくれて嬉しかった。

現代の若者は、学校と家庭、或いはバイト先や趣味の場など幾つかの狭い空間を行き来する生活が中心であり、それ以外の地域社会で、人と関わり、自分を表現したり、挑戦したり、失敗したりしながら育ってきた経験を持つ者は少ないと感じる。そのため、地域の住民は自分には関係のない知らない人であり、その人に話しかけられることは不可思議というよりむしろ危険なことと感じる若者が多いだろう。しかし、2-4では、偶然店に居合わせた地域の住民に話しかけられたことに、学生は驚きを感じながらも、地域の住民が自分たちに関心を寄せ、アドバイスをくれたことを嬉しいとプラスの出来事として捉え、学生の心に残る体験となっていることが読み取れる。人の温かさを感じた喜びや充実感は、学生に、地域社会における相互扶助の大切さ、地域共生意識の芽生えに繋がる体験となると考えられる。



荒地の草取り



畑づくり

（3）苗植え（5月下旬）

苗は学生たちが近くのホームセンターで購入し、その1週間後に苗植えをした。購入した苗はサツマイモ25本、えだ豆16本である。

3-1 どしゃ降りの中での苗植えでした。天候は予想できなかったけど、その日に苗植えを計画していたし苗も購入していたので、苗植えをやることにしました。畑作りは栽培者の気分や天候に関係なく毎日お世話をしなければならないので、雨の中での作業はとても大変でした。また植え方も考えながらなので時間がかかり終わった後の達成感がありました。

この日の天候は、学生が記述しているような“どしゃ降り”ではなく、ポツポツと弱い雨が降っている程度であった。“どしゃ降り”という表現には、学生が雨をネガティブな現象と捉えていること。また「天候は予想できなかったけど、その日に苗植えを計画していたし苗も購入していたので、苗植えをやることにしました」の記述では、学生が雨の中での活動にストレスを感じていることが読み取れる。そのようなストレスフルな環境の中での活動を学生は「とても大変でした」「時間がかかった」と記述しているが、目的が達成できた過程には、学生が雨の中での活動に自分を適応しようと努めたと推測される。「畑作りは栽培者の気分や天候に関係なく毎日お世話をしなければならない」の記述では、命に対する責任感の芽生えが読み取れる。文末には「達成感があった」とある。困難な状況の中で目的が達成できたことは、学生に自己肯定感や自己効力感をもたらす体験になったと考えられる。

3-2 雑草取りも土作りも苗植えも、1人ではできません。みんながいるからこそできたことです。植物を育てるのは予想以上に大変で、多分1人だったら挫折していました。だけどみんなが頑張っているから自分も頑張ろうとか、仲間の姿を見て自分も真似してみようという気持ちになれました。みんなで力を合わせて協力することで作業も捗るし、お互い同じ目標に向かっていてからこそ励みになるということに気が付きました。畑仕事を通してゼミのメンバーと仲が深まって楽しいです。

筆者が今回の活動において、学生に最も体験して欲しかったことは、仲間との協働である。なぜなら、ゼミ生の中には、全員で1つの目標に取り組むと決めたにも関わらず、気の知れた仲間と固まって小集団を作り、他の仲間以外とは積極的に関わりを持つとしない姿が見られたからである。3-2は、その学生の記述である。学生は、仲間の頑張りによって自分が支えられたこと、仲間と協力することの大切さに気づき、仲間との心理的な距離を縮める体験をしている。「雑草取りも土作りも苗植えも、1人ではできません」「多分1人だったら挫折していました」と記述されているように、協働の形成には、自己の限界を知ることが大きな意味を持つと考えられる。



畑のマルチに穴をあけ苗を植える



支柱を刺して植え穴を作る

（４）作物の管理（水遣り、雑草取り）（５月下旬～８月上旬）

学生は収穫まで当番制で水遣りをすることにした。また、SNSを活用しながら苗の育ちの様子や気づきを仲間と共有することにした。畑から水場までは距離がある。学生は猛暑の中畑と水場を往復しながら、じょうろで水遣りをしていた。学生たちがこの水遣りを継続できるか筆者は見守るつもりであったが、あまりにも大変な作業であったこと。また、学生の体調面での心配も懸念されたことから、水道にホースを設置することにした。しかしながら、ホースは数十メートルにもおよぶため、ホースを使う時は工夫（捻らない、強く引っ張らないなど）が必要とされる。そのため、ホースで水を遣るという行為についても、学生はかなり苦労したようである。

苗植えからちょうど1週間後に全員で畑を確認しに行くと、サツマイモの半分は地に根づかず、枯れて腐った状態となっていた。苗が腐ったことについて学生たちからは、日中の水遣りがいけなかったのではないかと、苗を植える深さが浅かったのではないかと、苗購入から植えるまでの苗の管理に問題があったのではないかと、命の力を信じてもう少し様子を見ようという意見が出たが、結果的には、再度新しい苗を購入し、植え直すことになった。苗が腐ってしまったことについて以下のように書いている。

4-1 考えさせられたことは、成功ばかりではないということです。サツマイモを枯らすことは想像していませんでした。水もあげていたし育つと思っていたのでとてもがっかりしました。この先も良くないことが待っているかもしれません。もしもの場合も考えてその場合はどうするのか、そこまで考えなきゃいけないということを考えさせられました。

物事の事態の予測性および望ましさに関わる感情・評価的意味について鈴木は「我々は、通常、事態は“予測通り”に進行・展開するものと考え、かつ、事態が“望ましい”内容のものであることを好む」ⁱⁱと述べている。この学生も水をあげていたのだからサツマイ

モは順調に育つと当然のように思い、自分が望む方向に進んでいくものと捉えていたと考えられる。さらに鈴木は「事態が予測通りでない時、なぜそこに戸惑いなどの“否定的”な感情・評価的な意味が生じるのだろうか」ⁱⁱⁱと疑問を呈している。学生の記述にも「とてもがっかりしました」とサツマイモが枯れてしまった事実否定的な感情を抱き、「この先も良くないことが待っているかもしれません」とこれから先をネガティブに想像している。しかし、重要なのは「もしもの場合も考えてその場合はどうするのか、そこまで考えなきゃいけないということを考えさせられました」という部分である。学生が失敗体験に肯定的な意味づけをし、多面的、多角的に今後を見通すことの大切さに気づく体験をしていることが読み取れる。

4-2 分かったことは、サツマイモの苗が根付くのは時間がかかることです。焦らず見守ることも大事だということ学びました。

4-3 作物の世話をしていく中で、水をあげる時間にも適した時間があることや、畝の高さも野菜により違うことなど実際に経験しないと分からない知識などを身に付けることができていると思います。

4-4 考えさせられたことは、野菜は植えるだけで上手く育っていくのではないことです。私が土に植えてあげることですくすく育つのではなく、植え方に沿って丁寧にやることです。野菜も子どもと同じように丁寧に関わっていかないといけないと思いました。日々の成長の記録をつけ、変化にすぐ対応していきたいです。

4-5 枝豆の葉っぱが虫にたくさん食べられていたが、小さな実が実っていることを発見した。さつまいもの茎から葉っぱが生えていて生命力の強さを感じることができた。ホースの水圧の調節が難しいので土を掘らないように優しい感じにたくさん水をあげた。

4-6 ちょうど雨が降ってきました。梅雨入りも近いかなと思います。枝豆は順調に育っています。心配だったさつまいももよく育っていました。虫食いもあつたりしていたが茎も葉も成長していて嬉しいです。1回目の失敗（苗が腐ってしまったこと）は、やはりしっかり植え付けられていなかったからでしょうか。水やりも大切だが最初の植え付けの大切さも感じる事が出来ました。

4-7 ホースで水をやるのにめちゃくちゃ苦労した。共同作業で水をあげ始めたが蛇口とホースが上手くはまらず何度も外れ、Aさんが水を被る羽目になった。Aがホースを押さえる担当、Bは水やり担当をすることになった。

4-2 から 4-7 は、学生の“気づき”の姿が書かれているものとして取り上げた。朝倉は、学校の生活科における気づきの概念規定を考察し“気づく”を、子どもが具体的な活動や体験、思考や話し合いなどの学習活動によって対象に出会い、自らの内面に、何らかの事実、関係、疑問、感情、感覚などを生起させ、子ども自身がそれを意識し自覚することと規定し、そのようにして意識され自覚された事実、関係、疑問、感情、感覚などを“気づき”^{iv}としている。4-2 では、サツマイモが根づく様子や時間経過について、「とても時間がかかる」とし、世話の仕方について「焦らず見守ることが大事」とある。4-3 では、水遣りの時間について「適した時間がある」とある。4-4 では、作物との関わり方について「植え方に沿って丁寧にやる」とある。4-5 では、ホースを使った時の水遣りについて「土を掘らないように優しい感じに」とある。4-6 では、苗を腐らせてしまったことについて「やはりしっかり植え付けられていなかったからでしょうか」と過去の事実を検証している。4-7 では、ホースを使っての水遣りについて「めちゃくちゃ苦労した」と表現している。これらは、繰り返し作物、その他の自然物や物事に学生が働きかけ、逆に周囲の環境から働きかえされるという双方向の活動を通して、学生が非常に感覚的に得た作物栽培に関わる気づきの姿であり、学生が自然への感性を養い、知識、技能を習得する体験といえる。

4-6 は 3-1 で小雨を“どしゃ降り”と表現した学生の記述である。3-1 では雨をネガティブな現象として捉える学生の姿が読み取れたが、4-6 では、この学生の雨に対する捉えに変化があるように感じられる。また、大半の記述に、作物に対して愛着を育む学生の体験が読み取れる。



大きく成長したえだ豆



2 週間の施設実習後の畑・雑草で覆われてしまう

(5) 枝豆の収穫・調理（8月の下旬）

えだ豆を収穫することになった。収穫したえだ豆は全員で調理をする予定で、献立を決めていたが、この時期は、コロナ感染症の状況が良くなかったため、調理はそれぞれが家庭で行うことになった。

5-1 収穫したえだ豆を使用し、えだ豆コロッケを作ってみることでさらに達成感を味わえました。自分で作ったえだ豆は市販で買う枝豆と比べると美味しく感じました。それは、一生懸命に毎日丹精込めて育てたからだと思いました。

5-2 小さな苗から、茎が伸び、葉っぱが沢山ついて、実がなって、そうやって順番に成長していく過程を見て、最後に収穫できたことを嬉しく思いました。水やりは大変だったけど、みんなで協力して、立派に育ちました。最後は家族みんなで食べました。かわいくなって育ててきた分、おいしさも倍でした。がんばりました。

自分たちが栽培した作物を食す。それはこれまでの取り組みの結果を意味する。学生は収穫したえだ豆をコロッケにしたり、家族と食べたりしている。その事実は、学生にとってこれまでの取り組みが成功だったと感じる体験となっていることが読み取れる。5-2の「水やりは大変だったけど、みんなで協力して、立派に育ちました」の記述では、学生が自己充実感や自己効力感を得ていること。また、自然の恩恵を感じる体験をしていることが読み取れる。学生たちは自分たちで育てた作物はいつもの味より美味しかったと記述している。それは、学生が食材の生産から消費を主体として取り組んだ体験の結果といえる。



収穫したえだ豆



蔓が長く成長したサツマイモ

5. 総合考察

本報告では、作物栽培活動が保育者としての資質育成にどのような意味を持つか。その体験意義を明らかにし、領域「環境」の専門的事項の授業において栽培活動を組み込んでいくための考察を試みた。

栽培活動を通して、学生は自然と関わる手強さを感じながら、自分の力の限界を知り、仲間と協働する大切さを体験していた。命を育てるという行為は知識を得るだけではうまくいかないこと。育ちは様々な要因に影響され先を見通すことが難しく予想通りにはいか

ないこと。だからこそ、命が育つ道筋を多面的・多角的に考察しておくことが大切であること。そして、実際に体験してみることの重要性を感じる学生の体験があった。学生たちにとって作物栽培は、戸惑いや不安、困難と試行錯誤の連続であり、学生たちは、驚き、不安、疑問と喜びを生起させながら、自然に対する感覚を養い、これまでの自然に対する既有概念を変化させながら、自然に関する知識や技術を習得していった。

学生たちは半年後、保育者として子どもと自然との関わりを支える立場になる。しかしながら、子どもが自然と触れ合う体験を得られるよう環境を整えたり、自然への子どもの心の動きを見逃さず援助したりするための基盤となる体験は乏しい。学生自ら五感を使って自然に触れながら、子どもの自然に対する興味関心の芽を掴んでいくことが重要である。

作物栽培は時間を要する活動である。学生たちが自然との関わりの中で、抱いた感情をさらに深めていける授業時間の確保、専門家のフォロー等は、栽培活動を授業に組み込んでいく上での課題となった。

引用文献

- i 文部科学省「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」答申、中教審第184号、平成27年12月
- ii 鈴木智美「事態に対する話者の期待と感情・評価の意味－理想化認知モデルの観点からの考察－」留学生日本語教育センター論集 34巻、27-42、2008年
- iii 同上
- iv 朝倉淳「生活科における「気付き」の概念についての基礎的研究－学習指導要領と指導要録の分析を通して」日本教科教育学会誌 第26巻、第24号、59-67、2004年

参考文献

山口智子、細田耕平、前田洋介、小野映介、渡邊令子「いもジェンヌの栽培活動を通じた大学生の食育と小中学校教員としての資質の育成」新潟大学高等教育研究第6巻 2018年

中川智之、橋本勇人、入江慶太、尾崎公彦、笹川拓也、大江由美、三宅美智子、重松孝治、橋本彩子、岡正寛子、種村暁也「『領域に関する専門的事項』に求められる授業内容に関する一考察：保育内容領域『人間関係』及び『環境』のモデルカリキュラムを手がかりとして」川崎医療短期大学紀要 38号：63-69 2018年

領域「人間関係」に関する専門的事項・授業内容の一考察

— 授業内容と保育実践を通して —

久保田 真規子

はじめに

文部科学省・厚生労働省・内閣府が連携した3法令同時改定は平成29年3月末改訂（定）告示後、平成30年から施行された。さらに質の高い幼稚園教諭を養成するために、平成31年に改訂された幼稚園教諭養成課程の教職課程に設置される「領域及び保育内容の指導法に関する科目」は「領域に関する専門的事項」と「保育内容指導法（情報機器及び教材の活用操作含む）」より構成されているⁱ⁾。本研究は、「子どもと人間関係・領域に関する専門的事項」をどう構成し、道筋をつけていくかについて先行研究・モデルカリキュラムをもとに授業構想について考察したものである。本論では、授業のねらい・工夫の柱を明らかにし、授業内容についてモデルカリキュラムと2校の養成校シラバスをもとに、求められる授業内容に着目した。神長（2017）は「領域に関する専門的事項」は幼稚園教育における「領域それぞれの学問的背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする」ものであり、『何をどのように指導するのか』という視点で見た時の『何を』を深める部分として位置づけられているのが重要と述べているⁱⁱ⁾。そこで、本論では授業構想において、現場の保育者の語りや実践の姿から、これからの保育者養成に必要な力を育むために何が必要かを深めた内容をまとめたものである。

キーワード領域「人間関係」幼稚園教諭養成課程、専門的事項、モデルカリキュラム

1. 研究の背景

幼児教育の重要性が着目される中、平成28年12月「幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校」の学習指導要領の、幼稚園教育要領の改訂が実施された。これらは日本の教育において3法令改訂（定）が幼児教育・小学校・中学校・高校教育を含めた大きな流れの上に成り立っているということだ。3法令改定の趣旨は3つある。①3歳以上のこどもについての「幼児教育の共通化」②子ども・子育て支援新制度での「幼児教育の「質の方向性」③小学校から見たときの「幼児教育で育つ力の明確化」であるⁱⁱⁱ⁾。

平成28年12月の答申の中で現代的な課題を踏まえた教育内容の見直しの項目に「幼児

期におけるいわゆる非認知的能力を育むことの重要性の指導などを踏まえ、身近な大人との深い信頼関係に基づく関わりや安定した情緒の下で例えば、親しみや思いやりをもって様々な人と接したり、自分の気持ちを調整したり、くじけずに自分でやりぬくようにしたり、前向きな見通しをもったり幼児が自分の良さや、特徴に気づき、自身を持って行動したりするようにする。」という記載がある。

幼稚園教育要領第1章総則 幼稚園教育の基本 3では、『幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、(中略)幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。』^{iv)}と記載し、すべての総則に「育みたい資質・能力」としての3つの柱と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿としての10の項目が記された。幼児教育に育てたい資質・能力が具体的姿で示され、求められる幼稚園教育が明らかになっている。そこで保育内容「人間関係」において、どこが改訂(定)のポイントになっているのかをあきらかにし、養成課程においては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を保育の中で具体的姿として確認していく視点が授業構想の一助となるのではないかと考えた。

1-1 幼稚園教育要領「人間関係」の改訂ポイント

改訂された新要領に示された幼児に育ってほしい10の姿に関連する、人間関係については、「道徳性・規範意識の芽生え」と記述され、人との関わりの中で身につけていくこととして重視されている。「友達と様々な体験をする中で良いことと悪いことがわかり、自分の行動を振り返り、友達の気持ちに共感することや道徳性が芽生えること」は家庭とは違う他者や、集団生活の中で葛藤を乗り越えながら、自分の気持ちを出しつつ仲間と一緒にどのように生活し遊びを展開していくのかを学ぶプロセスがあるということである。

特に、幼稚園教育要領解説(2018)^{v)}の中で、第2章ねらい及び内容の記載に、(2)身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。という記載の下線部分に着目したい。この部分は、園児の姿を理解しようとするならば、保育者は園児と関わっているときの自分自身の在り方や関わり方に、少しでも気付いていく必要があるということだ。実際に行った園児との関わりを振り返り、自分自身を見つめることを通して、自分自身に気付いていくことができるのであり、繰り返し、そのように努めることで、園児一人一人に応じたより適切な関わりができるようになるのである。また、自分の心の状態を認識し、安定した落ち着いた内容の取扱いでは、(1)教師の信頼にささえられて、(略)試行錯誤しながら諦めずにり遂げることの達成感や前向きな見通しをもって…(以下略)(2)1人1人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。(略)教師や他の用事に認められる体験し自分の良さや特徴に気づき自信をもって行動できるようにすることであると詳細に記載さ

れている。飛田(2017)^{vi)}は旧幼稚園教育要領と新幼稚園教育要領の「人間関係」教師の関わり方の記載の比較をしているが、「関わり」については旧幼稚園教育要領ではひらがなの「かかわり」であったのが漢字に変更されていること「1. ねらい (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 2. 内容 (5)友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。 3. 内容の取扱い (1) 教師と信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。(中略)」この下線部分が注目する点であると述べている。

文部科学省「幼稚園教育要領解説」(平成30年3月)「人間関係」内容の取扱いの解説では、「試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感や満足感を味わうことができるようにするには、その心の動きに対して柔軟な応じ方をすることが重要である。教師が答えを示すのではなく、幼児の心の動きに沿って共に心を動かしたり、知恵を出し合ったりする関わり方が求められる。心の動きに沿った教師の応答は、幼児と生活を共にしながら心の動きを感じ取ろうとする過程の中で生まれてくる。教師の応じ方は全て幼児の内面を理解することと表裏一体となり、切り離せない物なのである。」^{vii)}と記載されている。この言葉が意味するものは、幼稚園教諭の専門性には、幼児理解・総合的に指導する力が必要とされる。1人1人の日々の気付きや変化に着目する観察力に加え、環境、子ども同士の関係に臨機応変に対応する総合的な実践力がもとめられているといえよう。

そのうえで新幼稚園教育要領において「人間関係」は子ども同士の関係ばかりでなく教師と子どもとの人間関係が意図的、無意図的に影響を与えていることを理解しておくことが重要だと考える。

1-2 研究の目的

以上のことから、モデルカリキュラムの全体像をつかみ実践現場の事例とともに授業構想する事を目的とする。本研究は以下の3つのステップでまとめたものである。

- ① 先行研究調査から「幼児と教育・人間関係、指導法について」モデルカリキュラムの内容をつかみ、求められる幼稚園教諭の姿を明らかにする。
- ② 先行している保育者養成校のシラバスにおいて何をねらいとし、授業内容を構築しているのか、事例を調査し特色を明らかにする。
- ③ 保育現場の実践例から必要とされる授業構想を逆照射しモデルカリキュラムと紐付けを行い、授業の在り方、及び具体的内容について検証する。

2. 領域専門的事項に関する先行研究

文部科学省の『教育課程コアカリキュラム』^{viii)}

モデルカリキュラムには「幼児と人間関係」について当該科目では、「現代の幼児の人間関係の育ちに影響を与えている社会要因について理解し、幼児教育で保障すべき教育内容に関する知識を身に付ける。特に領域人間関係の基礎となる基礎理論として、関係発達と論的視点について学び、他者との関係や集団との関係の中で、幼児期の人と関わる力が育つことを理解する。」という授業の概要全体目標がある。先行研究調査から各養成校では、何を軸として養成課程のカリキュラム作成のポイントを構築しているか参考とすべく調査した。

①『平成 28 年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質脳力の視点から養成課程の質保証を考える－』^{ix)}

平成 29 年 3 月 一般社団法人 保育教諭養成課程研究では、「幼稚園教諭として不易とされる資質能力として、幼稚園教育要領に示す 5 領域の教育内容に関する専門知識を備えるとともに 5 領域に示す教育内容を指導するために必要な力等を備え、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等、幼児期の学校教育を実践専門家としての側面からみていく必要がある」と記されている。さらに家庭との連携、小学校の円滑な接続のための力や、特別支援が必要な子ども達への指導を実践していく専門家としての側面が記載され、新たな課題、ICT 活用など自らの資質向上に向けた努力を惜しまない姿勢や力量が幼稚園教諭に求められている。研修ガイド^{x)}の作成のもと、一貫してキャリアステージに応じた研修についても示され、組織的に課題を解決する力はそれぞれの成長の節目・ミドルステージにももともとめられる。養成課程においては、幼児教育における基礎的知識や理解、技能の修得、実習等色々あるが子どもへの温かな感情の育ちも期待されている。

②中川智之ら (2018)^{xi)} が、保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとし「領域に関する専門的事項」に関わるこれまでの研究として、奈良教育大学の行っている一連の研究を土台に、幼稚園教育要領の各領域に示された各ねらいの内容と科目を担当する教員の研究分野における幼児教育に関する知見との関係について論じている。特に注目すべきは、領域「人間関係」においては、「幼稚園の生活・活動」についても多く取り扱われ、他方、領域「環境」においては、「幼稚園の生活・活動」に注目したものは少なく、「周囲の環境」が多く取り扱われているという二者の対比である。これは、幼児が経験し得る様々な環境について理解を深め、幼児の多様な経験を幼稚園外にも取り入れる内容である。領域「人間関係」と領域「環境」の授業モデルにおけるこのような相違から、「領域に関する専門的事項」は、幼稚園外における幼児の

経験内容もその射程に含んでいると考えられる論である。幼稚園教諭としての指導法を学修する「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の射程とは異なると指摘し、「領域に関する専門的事項」の科目においては、幼稚園という枠組みに捕らわれることなく、現代の家庭や地域社会における幼児の生活を踏まえた授業内容を構想すること強調している。さらに、現代の特徴や課題についても、授業内容の射程に含めるべきものとして考えられる。この点は、シラバス作成上、授業内容を組み立てる際に「環境」と「人間関係」の工夫において参考にしたい視点である。

3. 領域「人間関係」専門的事項に関するモデルカリキュラム

モデルカリキュラム作成は、各大学において、その特色・編成・学生の興味関心に合わせて創意工夫されることを吟味し取り入れることが求められている。

そのねらいは、学生が養成段階で「全体目標」「一般目標」「到達目標」と見通しを持って学ぶこと、そして、5領域の教育内容を実践するために必要な資質能力を明確化し、幼稚園教諭養成の質保証を行い、幼児教育の質の向上につなげる意図がある。

以上のことを踏まえ「幼児と人間関係」の領域に関する専門的事項を以下に示す。

3-1 モデルカリキュラムの実際

以下に「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム^{xiii)}を示す。

全体目標

当該科目では領域人間関係の指導の基礎となる幼児の人と関わる力の育ちに関する専門的事項について身に付ける。

(1) 幼児と人間関係における現代的課題

一般目標：幼児をとりまく人間関係をめぐる現代的課題を理解する。

到達目標 1) 幼児を取り巻く人間関係の現代的特徴とその社会的背景を理解している。

2) 人と関わる力のそだちがその後続く一人一人の人生を支える力となることを理解している。

(2) 幼児の発達と領域「人間関係」

一般目標：幼児をとりまく人間関係をめぐる現代的課題を理解する。

到達目標 1) 幼児期の人間関係の発達について、幼稚園生活における関係発達論的視点から理解する。

2) 幼児期の遊びや生活のなかで育ち人と関わる力の発達について、教師との関係、幼児との関係、集団の中での育ちを観点として説明できる。

3) 自立心の育ちについて発達の姿と合わせて説明できる。

4) 協同性の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。

5) 道徳性・規範意識の芽生えについて、発達の姿と合わせて説明できる。

6) 家族や地域との関わりについて、発達の姿と合わせて説明できる。

[留意事項] 1) 映像資料や事例等を且つ融資幼児期の人間関係の発達について、幼稚園生活における関係発達論的視点から理解する。

2) 領域「人間関係」の背景となる学問的基礎や幼児教育に関わる専門性を有する人材が担当するにふさわしい。

考えられる授業モデル

1) 講義初めの段階で、親子や兄弟関係、地域における子ども同士の関わり等、幼児を取り巻く人間関係について、1950年代頃からの年代毎に異なる特徴的な事例を挙げながら、現代の特徴と課題を考える機会を設け、講義の内容に関心をもたせる。

(1)-1)

2) 幼稚園教育において育みたい資質能力を領域「人間関係」の視点から考察し、大学生生活で求められる人と関わる力との関連について話し合う。

(2)-2)

3) 幼児の様々な発達の諸側面が人との関わりで育つことについてそれぞれの発達の時期の特徴と関連付けて理解できるように、具体的な事例を基に説明する。

(2)-1)、(2)-2)、(2)-3)、(2)-4)、(2)-5)、(2)-6)

4) 幼稚園生活における規矩にはどのようなものがあるか等について、具体例を挙げ、それぞれの決まりが幼児にとってどのような意味をもつか考え、話し合う機会を設ける。

(2)-5)

5) 人間関係領域の最新の知見に基づき、集団の中で見られる具体的な幼児の姿や幼児同士の関係の発達が理解できるように説明する。

(2)-1)、(2)-2)、(2)-3)、(2)-4)、(2)-5)、(2)-6)

※上記授業モデルに付記した番号は、特に関連の深い到達目標の番号であり、Noとしては示していないが、他に関連する項目もあるので、事例の着眼点や授業展開の仕方によってことになってくることに留意。

以上が「領域に関する専門的事項」の人間関係のモデルカリキュラム（保育教諭養成課程研究会 2017）として具体的に記載されている。このモデルカリキュラムをもとに人間関係に求められているものは何かについて、次に一般社団法人保育教諭養成課程研究会が出している幼児一人一人が 未来の創り手に 一幼児教育 Q&A— 保護者や地域の皆様へ園長先生や地域の幼児教育のリーダーの方々へ より抜粋（2020/05/28）から4章で読み取っていききたい。

4. 人間関係にもとめられる教師の役割

4-1 調査結果①

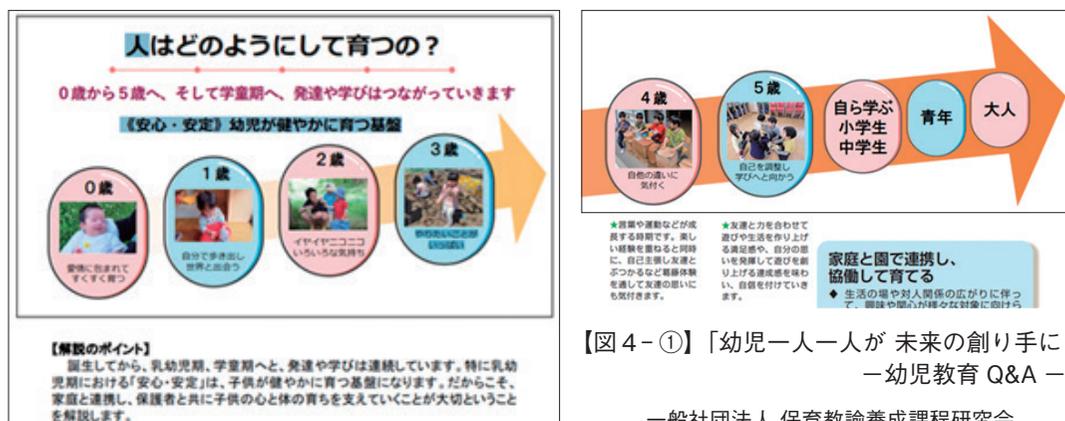
「領域の視点」を活かしつつ子どもの理解を深めるためには、保育現場の実践で出会う子どもの姿をどう理解しあい、生活のなかで総合的に分析していくかという具体的な方法を養成課程で育てていくことが鍵となる。そこで、領域「人間関係」では、子どもの関係・保育者との関係において、また地域や保護者との関わりの事例・事象をどう観察していくか、モデルカリキュラムに照らし合わせて考察する。

「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム（保育教諭養成課程研究会 2017）をどう解釈し実践していくのか、指標となる下記の資料を図4-①に示す。

令和2年一般社団法人保育教諭養成課程研究会は、『幼児一人一人が 未来の創り手に一幼児教育 Q&A— 保護者や地域の皆様へ』^{xiii)}の冊子の中で園長先生や地域の幼児教育のリーダーに向けた手引きを作成している。

冊子の冒頭に「幼児教育について保護者や地域の皆様にご理解をいただき、子供の健やかな成長を一緒に支えていくことを目指している。」という文面で紹介されている。

主な内容は、子供の育ち、遊びの重要性（遊びは幼児にとっての学び）、幼稚園教育（幼保連携型認定こども園の教育及び保育）を通して育みたい資質・能力、幼稚園教育（幼保連携型認定こども園の教育及び保育）と小学校教育とのつながり、家庭や地域との連携について書かれている。



【図4-①】「幼児一人一人が 未来の創り手に一幼児教育 Q&A—」

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会
幼児一人一人が 未来の創り手に 一幼児教育 Q&A—
保護者や地域の皆様へ 園長先生や地域の幼児教育の
リーダーの方々へ（一部抜粋）

例えば、「園で教師は何をしているのか」という問いに、『教師は幼児の思いに共感し、一緒に考えたり、友達とのやり取りを支えたりします。教師の言動が幼児にとって、意欲を高めたり興味を広げたりするきっかけになるように心掛けています。園外の研修会にも

積極的に参加し、それぞれが学んだことを園内で共有し、日々の指導や園内の研究に役立て、幼児が様々な学びを得られる「質の高い教育」を追求しています。』^{xiv)} という文面がある。

教師が園で子どもを中心に人的環境として、何のために共にその場にいるのかという具体的な姿が示されている。変化する社会の中で、子どもを取り巻く環境がここ数年でも大きく変化している。幼児教育に携わる幼稚園教諭の役割、資質についてより深い視点で目の前の子どもを捉えることが求められていることは言うまでもない。養成機関においては、子どもの発達を理解し、専門的知識・技術に加え、その礎となる、心理的安全性が保たれる養護と教育を理解した人との関係を築く土台を具体的な関わりを通し、こどもと共に学び続ける姿勢がもとめられているといえよう。

井桁(2021)は『保育の質を考えあうシンポジウム 8.29』^{xv)}の中で「VUCAの時代行先が不透明で先が見えない時代に主体的・対話的・深い学びを、どのように考え子どもに保障していくか。」を具体的な子供の姿から検証している。

保育者の意図することに従う子どもが主体性のある子どもなのか、教えられたことを覚えてできるようになる、トラブルも起こさずみんな同じということがコミュニケーション力高いことなのか、幼児教育の現場でどうとらえるのか、フォーカシングイリュージョン(ダニエル・カーネマン)の例を上げこれからの保育について一石を投じ述べている。「対話的とはどういうことか」井桁自身が保育者時代の失敗から、子どもを観る視点として上手か下手かという評価のままざしではなく、こどもが困っていることに気付く視点の専門性が必要と述べている。人間関係において人的・物的環境のかかわりが、子どもの気持ちに共感し、しなやかな発想と関係性を深め合う第一歩といえるだろう。

養成の場面では、子どもと教師の関わりを実践を通しての学び育むプロセスがもとめられているといえよう。

例えば、一例を紹介すると「園で教師は何をしているのか」という問いに、『教師は幼児の思いに共感し、一緒に考えたり、友達とのやり取りを支えたりします。教師の言動が幼児にとって、意欲を高めたり興味を広げたりするきっかけになるように心掛けています。園外の研修会にも積極的に参加し、それぞれが学んだことを園内で共有し、日々の指導や園内の研究に役立て、幼児が様々な学びを得られる「質の高い教育」を追求しています。』という記述がある。

教師が園で子どもを中心に人的環境として、何のために共にその場にいるのかという具体的な姿が示されている。

変化する時代の中で、子どもを取り巻く環境がここ数年でも大きく変化している。幼児教育に携わる幼稚園教諭の役割、資質についてより深い視点で目の前の子どもを捉えるこ

とが求められていることは言うまでもない。養成機関においては、子どもの発達を理解し、専門的知識・技術に加え、その礎となる、心理的安全が保たれる養護と教育を理解した関係性の築きと土台を具体的な関わりを通し、こどもと共に学び続ける姿勢がもためられているといえよう。

5. 領域「人間関係」と授業構想・現場保育実践の関係

人間関係における保育の質の考えとして、井桁（2021）は、結果を急がず、人として生きる楽しさに気付く保育をどう日常に取り込んでいくかを提案している。

汐見（2020）^{xvi} は、『“子ども主体の保育”の現在地<前編>』で答えのない時代に、子ども自身が自分のいのちの物語を生きる上で、保育者はどう子どもと関係を築いていくのかについて触れ、これからの社会では、1人ひとりの人間がアイデアを出し「保育者は子どもの意図、つもり、気持ち等を「善く」解釈してその子の気持ちに寄り添うこと」が求められると述べている。

さらに汐見（2021）^{xvii} は、子どもが人間として存在していることに原点を置き、保育者自身がその子らしさを感じ保育をしていく感性の重要性を述べている。子ども理解においてこどもをどう観ていくかという、日本の教育・保育における「学びを実践に変える新しい21世紀型の教育」として提案している。子どもを理解することは、アンダースタント、瞬間に判断し下から支えることであり、外からの評価で一律に判断することではないという新しい提案をしている。

領域「人間関係」においては、保育者養成の現場での、学生自身の学びの中に主体的で対話的な深い学びがもためられている。特に領域「人間関係」における、園外の地域資源・保護者・人的環境のひとつとしての保育者の関わりは、環境とも密接に関連し、多様な場面で人と関わる力がもためられているといえよう。では何を学ぶのか、目標を実現するためにどのような内容・方法がもためられるのかが地域・各大学の工夫すべき点である。

① 授業到達目標の定め方

モデルカリキュラム作成にあたっての留意事項の中で、『モデルカリキュラムは、各大学において教職課程コアカリキュラムに沿いシラバスを作成する参考としていくつかの授業モデル』が示されている。各大学において、その特色・編成・学生の興味関心に合わせて創意工夫されることを吟味し、取り入れることが求められている。

そのねらいは、学生が養成段階で「全体目標」「一般目標」「到達目標」と見通しを持って学ぶこと、そして、5領域の教育内容を実践するために必要な資質能力を明確化し、幼稚園教諭養成の質保証と幼児教育の質の向上につなげる意図がある。

以下に先行2校のモデルカリキュラム作成のねらい、到達目標、概要の文言から授業構想の特色に着目したい。

A校(2021)では、到達目標に、「(1)乳幼児期を取り巻く人間関係をめぐる現代的課題について、社会的背景や人生における乳幼児期の特性について踏まえ理解する。(2)乳幼児期の人間関係の発達について、乳幼児期の人と関わる力の発達、遊びや生活の中で育つ力の発達、自立心の育ち、協同の育ち、道徳性、規範意識の芽生え、家族や地域の関わりなど、保育園、幼稚園生活における関係論的視点から理解する。」

授業概要として、「現代の幼児の人間関係の育ちに影響を与えている社会的要因について理解し、幼児教育で保障すべき教育内容に関する知識を身につける。特に、領域「人間関係」の指導の基礎として発達論的視点について学び、他者との関係や集団との関係の中で乳幼児期の人と関わる力が育つことを理解する。」^{xviii)} という内容である。

一方B校(2021)は、授業のねらいを「人は人やモノとのかかわりによって発達していく。なかでも乳幼児期は人とのかかわりが特に重要である。本講義では保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示される領域「人間関係」の理解を深め、関係性の中で獲得していくこと、学び合うことや育ち合うことの重要性を知り、子どもの人間関係の発達について考える。その際、保育者は何をどのように援助しているのかにも注目し、子どもを観る視点や具体的な援助方法について学ぶ。また、他者とつながる保育活動案を作成し、幼児の人間関係を踏まえた活動を考える。」^{xix)} としている。

授業到達目標として「・乳児に対する応答的な関わり的重要性とその実践を知り、実習等に活かす。・人間関係が広がりを見せる中で、保育者が人とのかかわりを支えること、また子ども同士がつながることの重要性に気づきその援助について考える。・人間関係の育ちを意識し、活動や援助について考え、実践することができる。」をあげている。

2校のねらいに着目すると、柱は関係性の中で獲得していくこと、学び合うことや育ち合うことの重要性を知り、子どもの人間関係の発達について考える授業構想となっている。その際、保育者は何をどのように援助しているのかにも注目し、子どもを観る視点や具体的な援助方法について学ぶという発達論的視点と実践における子どもとの関わり援助の実際について理解する内容になっているといえる。

さらに幼稚園という枠組みに捕らわれることなく、家庭や地域社会における幼児の生活を踏まえた内容も盛り込まれている。

では次に現場実践とモデルカリキュラムの関係を考えてみたい。

② 保育実践と授業内容の紐づけについて

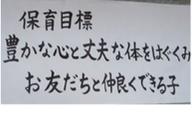
保育者養成は様々な視点を鑑みながら、授業構想が必要になってくるとされる。学生が育った家庭での価値観、人間関係を構築していく力を持って、その上に保育者としての

常識を身に付け、観察力、指導力に磨きをかけていくことが出来るように、保育者養成校における課題が明らかになってきた。資質能力は経験と体験から培われていき、保育者としての気づく力がその方向性を示している。

図5-①に示す本研究の協力園に限らず、1950年代から2021年の時代の変化の中で、創立時の園の名称・地域からもとめられる役割・機能に変化があった園は少なくないであろう。

さらに学校教育法・義務教育・高校教育を踏まえ、幼稚園教育要領の改訂の歩みから3法令改訂（改定）に至る要点も、国内外の幼児教育（保育）の大切さが実現されるという大きな動向によるものである。

図5-①にあげた2園の取り組みは、子ども理解を深めるところにねらいを置き、園の目標・グランデッドデザインに基づく、育みたい子どもの姿を共通理解する事である。2園ともモデルカリキュラムの項目を実践に置き換え、実践を見える化したことが特色である。

モデルカリキュラム	授業構想	A 園	B 園
<p>【1】講義初めの段階で、親子や兄弟関係、地域における子ども同士の関わり等、幼児を取り巻く人間関係について、1950年代頃からの年代毎に異なる特徴的な事例を挙げながら、現代の特徴と課題を考える機会を設け、講義の内容に関心をもたせる。 ※目標：（1）-1）</p>	<p>子育ての変遷と社会の変化 ・女性の社会的役割変化 ・世帯構造の変化→県内・外の姿 ・一億総活躍社会労働化</p>	<p>園の変遷 ・公立→私立へ民営化 ・保育園→認定こども園/ 外の姿</p>	<p>園の変遷 ・地域に数園ある保育園が合併 ・保育園→幼稚園→認定こども園名称幼稚園へ</p>
<p>【2】幼稚園教育において育みたい資質能力を領域「人間関係」の視点から考察し、大学生活で求められる人と関わる力との関連について話し合う。 ※目標：（2）-2）</p>	<p>・乳・幼児期の自立と協同性の育ち ・幼児期の道徳性・規範意識の芽生えと協同性を理解した保育者を目指す学生の姿</p>	<p>園の目標:何をそだてるのか </p>	<p>園のグランデッドデザイン </p>
<p>【3】幼児の様々な発達の特徴が人との関わりで育つことについてそれぞれの発達の時期の特徴と関連付けて理解できるように、具体的な事例を基に説明する。 ※目標：（2）-1）、（2）-2）、（2）-3）、（2）-4）、（2）-5）、（2）-6）</p>	<p>・養護と教育の一体化・乳幼児期の愛着形成 ・乳幼児期の自立と協同性の育ち</p>	<p></p>	<p></p>
<p>【4】幼稚園生活における規範にはどのようなものがあるか等について、具体例を挙げ、それぞれの決まりが幼児にとってどのような意味をもつか考え、話し合う機会を設ける。 ※目標：（2）-5）</p>	<p>・幼児期の道徳性・規範意識の芽生えと保育 ・友達と協同で使うスキル、困った時、わからないときに助けを求めるスキル</p>	<p></p>	<p></p>
<p>【5】人間関係領域の最新の知見に基づき、集団の中で見られる具体的な幼児の姿や幼児同士の関係の発達が理解できるように説明する。 ※目標：（2）-1）、（2）-2）、（2）-3）、（2）-4）、（2）-5）、（2）-6）</p>	<p>・幼児期から学童期以降への育ち ・人間関係の広がりや深まり（家庭・園・地域との関係性）</p>	<p></p>	<p></p>

【図5-①】モデルカリキュラムと授業構想、A園・B園保育実践

図5-①の2園の実践を保育者養成校で授業構想にどう紐づけしていくかを考える際に、園のねらいが保育実践（環境・人との関わり）で具現化されているかという考察から考えていきたい。

保育者として気付く力が語り合いや様々な意見を聴き、培われていく。

たのしかった、面白かったという感想だけではない、考察する視点を実践から逆照射し、学びを深め、専門的視点から授業を再構築していくことが求められているのではないかと筆者は考える。

その事例のひとつとして、園内研修で実践された人との関わりをモデルカリキュラムの項目から考察したい。

以下図5-②は、B園のグランデットデザインに基づいた保育の実践と「自分を見てくれる人との間で成り立つ人間関係の深まり」事例である。この事例をモデルカリキュラムにあてはめて考えてみたい。「遊んだら片づける」という内容は、規範意識・道徳性・遊びの協同性等が育つ場面であろう。

しかし、子どもの気持ちは「みんなで仲良く遊ぶ。遊んだら片づける。」という単純なことではない。遊びから片づけの時間に起こる一コマに、5歳児の葛藤と関わる子ども、大人の意図的な姿と、子どもの心には葛藤や戸惑い、子ども同士の関わりが遊びの一コマに見えてくる。そのシーンを園全体で、大人かがどう関わり、子ども自身が自ら気持ちを動かし、その行動に辿りつくかをB園では丁寧に追っている。

<p>A.自分に気が付いてくれる人は必ずそばに「いてくれる」ということ 養育者のbeingへの信頼 社会性と対人行動</p> <p>B.自分は「いてもよい」存在として扱われていること。 自分のbeingへの信頼 自尊感情と自己受容</p> <p>C.自分を見てくれる人との間でやりとりが成り立つ 相互性の気付き 自己統制による心理的な安心</p>		<p>左記の図は、友達遊びの中でもやややかかえた年長児に対する実践である。</p> <p>①自分に気が付いてくれる人は必ずそばに「いてくれる」ということを伝える責任との関係</p> <p>②自分は「いてもよい」存在として扱われている、大好きな友達との「遊び」を中心に子どもの協同遊びの深まり。③自分が見つけたものを通して起こしたアクションに大人が自分を見てくれる「安心との間でやりとりが成り立つ→自ら片づけるという自己統制による安心→「片づけをする気持ちへ」相互性の気付きから自己統制へ</p>
---	--	---

【図5-②】B園保育実践 自分を見てくれる人との間でやりとりが成り立つ姿

「正解を求めることをせず、他者との関係や集団との関係の中で人と関わる力が育つことを理解する。」ということはどういうことか、できないこと、しないことを良いか悪いかで判断せず、その時に発する言葉、視線、心の揺らぎにつきあいながら、子ども自身が自身で行動することに気付いていくことを教師が共感しながら支え、自分を見ていてくれる人とのやり取りから片づけたい気持ちにその場にいるすべての教師が寄り添っている。

6. 考察

子どもの豊かな感性と人間関係を育むために教師にもとめられていることは何か、秋田(2008)^{xx}は、現場の教師が相互に言葉を重ねたり、繋いだりしながら話しあう研修の重要性に触れている。その上で、保育の「見える化」と、子どもの事実を見る、学んだことを話し合う、明日からできることを語ることで、園のコンピテンスを高めていくことを提案している。研修を重ね、多様性のイメージを理解し合う中で、さまざまな多様性の姿を理解し「保育者自身の捉えの器が大きくなり、柔軟になる姿が必要とされる保育者の資質・能力に結びつく」と述べている。さらに秋田(2021)^{xxi}は『乳幼児期の教育とケア(ECEC)における有意義な相互作用 / +やりとりを支えるために』のシンポジウムの中で、職員の養成、経験、役割に応じた専門性向上のための活動は、「職員が有意義なやりとりに効果的にかかわるうえで成り立つ」と提案している。

平成29年7月に内閣府・文部科学省・厚生労働省により発行された教育課程説明会の資料には『子どもの主体的な活動を促すための教師の役割は「理解者」「よりどころ」と「共同作業」「モデル』』という文言で、教師を多様な関わりをもつ存在として示し、3法令全てにおいては「教育の場を意識した教師の役割」について記述している。

本研究では、先行研究調査から「幼児と教育・人間関係、指導法について」モデルカリキュラムの内容をつかみ、求められる幼稚園教諭の姿を確認した。さらに幼児教育の強化と保育者養成校の「何を学ぶか」の視点から、先行のA校、B校を例に子どもの行動を発達的に理解するために「『何をどのように指導するのか』という視点で『何を』を深める部分」を各養成校でどう位置づけているのか、また、神長(2017)が述べている、現場の実践を通し子どもの姿・教師の関わりをどう観て、聴いて、考えるのかという「総合的な経験の積み重ね」は、養成校の学びで育まれるきっかけになっていくと理解した。

さらに、丁寧に時間を積み重ねながら子どもを理解していくことで、人的・物的調整による子どもたちが自ら遊びだす環境構成の変革に取り組み保育が融合されていく方向に舵が取られている「A園とB園」の研修を重ねて子どもの姿と教師の関わりを深め合う園の努力と寛容性が目に留まった。

おわりに

保育内容領域「人間関係」で求められている資質能力の向上には、成長過程である発達論的視点と母親など、養育者/地域社会とのコミュニケーションを通し人との関係が積み重ねられていくことが不可欠である。幼児教育の現場では新型コロナ対策、人手不足、さまざまな勤務体制等、課題は多い。しかし、変化する社会の中で問いを重ね、子どもを慈しみ知恵を出し合い語り合う学びが、もとめられている。幼稚園教諭に多様な専門性をもとめられている。昨今の社会状況を考えると、主体的に学ぶ・対話的に学ぶ意欲を育むこ

とが汐見(2020)の語る、「21世紀型保育」^{xxii)}へと繋がることであろう。これからの時代に求められる幼稚園教諭の資質能力をあきらかにし、何をどう教えるか、養成段階で何を身に付けるか、その意味と理解が問われている時代といえる。

参考文献

- ・幼稚園教育要領(2017告示) 第1章総則 幼稚園教育の基本 ・3内容の取扱い(1)幼稚園の教育内容等:文部科学省(mext.go.jp) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年3月告示)(※内閣府ホームページ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領の全部を改正する件について 別添資料(PDF)へリンク)
- ・一般社団法人 保育教諭養成課程研究『平成28年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—』平成29年3月
- ・幼稚園教諭養成課程をどう構成するか—モデルカリキュラムに基づいた提案— 無藤 隆 代表 保育教諭養成課程研究会 編(2017)
- ・神長美津子『幼稚園教諭・保育教諭研修ガイドⅡ—養成から現職への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修—』平成30年6月21日 幼児教育の実践の質向上に関する検討会(第2回)

引用文献

- i) 無藤 隆「3法令改訂(定)の要点とこれからの保育の中で」p66
- ii) 無藤 隆 代表 保育教諭養成課程研究会『「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム』(保育教諭養成課程研究会2017) pp13~14
- iii) 「3法令改訂(定)の要点とこれからの保育の中で」pp22~25 第三章 pp60~66
- iv) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(mext.go.jp)
- v) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(2018) p20
- vi) 飛田 隆『幼稚園教育要領における「人間関係」についての一考察』茨城キリスト教大学紀要第53号 31 人文科学 p.31~38 Ibaraki Christian University Library
- vii) 文部科学省、幼稚園教育要領解説(平成30年3月)株式会社フレーベル館 平成30年p2・p167
- viii) 一般社団法人 保育教諭養成課程研究『平成28年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—』平成29年3月
- ix) 幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究:文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm
- x) 神長美津子『幼稚園教員などに求められる資質能力とその研修体系—平成26年~29年度文部科学省委託幼児期の教育内容深化・充実調査研究の結果を踏まえて—』平成30年6月

- xi) 中川智之、橋本勇人、入江慶太、尾崎公彦、笹川拓也、大江由美『幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」に求められる 授業内容に関する一考察 ―保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとして―』川崎医療短期大学紀要 pp11～（2018）
- xii) 無藤 隆 代表 保育教諭養成課程研究会『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～ モデルカリキュラムに基づく提案～』 pp144～145 榊萌文書林
- xiii) 一般社団法人 保育教諭養成課程研究会『幼児一人一人が 未来の創り手に ―幼児教育Q&A― 保護者や地域の皆様へ』園長先生や地域の幼児教育のリーダーに向けた手引き 令和2年
www.youseikatei.com/pdf/20200528_4.pdf
- xiv) 前出『幼児一人一人が 未来の創り手に ―幼児教育Q&A― 保護者や地域の皆様へ』園長先生や地域の幼児教育のリーダーに向けた手引き』
- xv) 井桁（2021）は『保育の質を考えあうシンポジウム2021.8.29』
- xvi) 汐見 稔幸（2020）『“子ども主体の保育”の現在地<前編>』
- xvii) 汐見 稔幸（2021）『保育の質を考えあうシンポジウム2021.8.29』
- xviii) 白梅学園シラバス2021（portal.shiraume.ac.jp/public/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL_SyllabusSansho.aspx?P1=）
- xix) F-Station（fujijoshi.ac.jp）カリキュラムマップ2021 pp42～43
- xx) 秋田喜代美（2008）「園内研修と保育支援」『臨床発達心理実践研究』3 pp35～40
- xxi) 秋田喜代美 発達保育実践政策学センター公開シンポジウム「人生の豊かなはじまりを支える 幼児教育・保育～OECD幼児教育・保育白書第6部資料より～」（2021）
- xxii) 汐見 稔幸（2020）YouTube セミナー 「21世紀型の保育へ～学びを実践に変える」
<https://note.com/musicandmagic/n/na871fc98d0e3> 2020.9.2

前号（第72号）目次

資料

令和2年度卒学式の学長式辞	石本勝見
令和3年度入学式の学長式辞	草間俊之

論文

保育士養成課程でのグループKJ法を用いた演習効果と課題について ——「学び」の意味と汎用性の考察——	笠井友治郎
遠隔授業に関する一考察 —新型コロナウイルス対応をめぐって—	小川 崇
新潟市の放課後に関する事業の現状と課題 —住民自治としての子どもの育ち・学び保障—	渡 邊 彩
市町村子育て支援機関との連携で重要となること ～外部の専門家の視点から～	稲 場 健
コロナ禍における遠隔授業についての一考察 ～体育・スポーツなど実技系科目を例として～	中 島 孝 子
戦後教育実践における「地域学習」の位置付け	佐 野 浩
更正の請求における法人税法と所得税法の連関	大 澤 弘 幸

○本号（第73号）執筆者紹介（執筆順）

新潟中央短期大学	坂内 寿子	教授
新潟中央短期大学	村木 薫	教授
新潟中央短期大学	永井 裕紀子	准教授
新潟中央短期大学	久保田 真規子	准教授

○編集委員

久保田 真規子
福原 英起
太田 裕真

曉星論叢 第73号

2021年9月20日印刷

2021年9月20日発行

編集者 新潟中央短期大学論叢編集委員

発行者 新潟中央短期大学

〒959-1321 新潟県加茂市希望ヶ丘2909-2

印刷所 (株)大創

GYŌSEI RONSŌ

(BULLETIN OF THE NIIGATA CHUOH JUNIOR COLLEGE)

No.73

SEPTEMBER 2021

ARTICLES

A Consideration on Teaching “Technical Area of Expression”

～ Based on the “ Expression Activities Method ” ～

…………… Hisako Bannai …… 1
Kaoru Muraki

A Study about Professional Matters of Area Related to
“Environment”

～ The importance of crop cultivation experience for qualifications
development of kindergarten teachers and nursery teachers ～

…………… Yukiko Nagai …… 13

Courses related to professional problems in the field of
“Human Relations”

— Through class content and childcare practice —

…………… Makiko Kubota …… 25

Published by

Niigata Chuoh Junior College

2909-2 Kibougaoka Kamoshi Niigata-Prefecture

J A P A N